

平成 30 年 5 月 8 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02486

研究課題名(和文) 文法性判断のずれ及びぶれの発生メカニズムの解明および解消方法(発展)

研究課題名(英文) Investigation into differences and inconsistencies of grammatical judgment and its resolution

研究代表者

森田 久司(MORITA, Hisashi)

愛知県立大学・外国語学部・准教授

研究者番号：30381742

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、先の若手研究(B)『文法性判断のずれ及びぶれの発生メカニズムの解明および解消方法』(課題番号24720181)の発展として行われた。

まず、日本語とシンハラ語のWH疑問文の統語的・意味的分析に関して、インターベンション効果が観察される環境が日本語とシンハラ語で同一であった。次に、名詞句接続詞の「か」と「も」について、疑問詞に「か」または「も」をつけると数量詞に変化する。本研究では、韓国語のケースも含めて、名詞句接続詞の統語的・意味的構造を明らかにした。最後に、インターベンション効果自体について、疑問詞が島内にある場合の解決方法は言語間で異なりうるということがわかった。

研究成果の概要(英文)：This research is based on the previous Kaken research about grammatical judgement of intervention effects. The research developed in three areas. First, a proposal has been made to account for the common aspects of intervention effects in Japanese and Sinhala. Secondly, a syntactic and semantic analysis of indeterminates (or wh-elements) with focusing particles in Japanese and Korean. The comparison between the two language has also been made and an explanation has been provided. Finally, the research has suggested a possibility that languages employ a different strategy to escape the subjacency condition. In other words, alternative semantics and binding must be employed.

研究分野：統語論

キーワード：intervention effects subjacency condition coordination pied-piping alternative semantics question/focus particles conjunction doubling disjunction doubling

1. 研究開始当初の背景

ことばとは慣習により作られたのか、それとも生得的なものなのかという議論がよくなされるが、生成文法においては、言語獲得の速さ、共通性、および正確性から、初期の段階から、生得性を主張してきた。その生得的に誰もが持っている文法知識を明らかにすることが、言語学者の目的である。そして、その文法を正確に定義するために、母語話者の文法性判断を仮説構築のためのプライマリーデータとして扱ってきた。しかし、日本語の WH 疑問文においては、言語学者内でも文法性判断が一致しないことが、知られており、このことが真理を突き止めるために必要な正確な分析を妨げてきた。本研究ではそのような文法性判断のずれやぶれについて、ひとつの結論に到達した。具体例をもとに示す。(1){健は/??誰もが/??健かメリーが}何を買いましたか?

上のように、「誰も」や「~か~」のような(介在詞(intervener)と呼ばれる)語句を疑問詞の前に置く(又はC統御する)と、非文になると言われ、その現象を介在効果(Intervention Effects)と呼ぶ。さらに、(1)の主語が右の候補ほど、非文の程度が上がると言われているが、「誰もが」は問題ないという話者もいるというように、日本語の WH 疑問文の文法性判断は特に個人差が顕著に見られる。

しかしながら、本研究の前に行われた研究(若手研究(B)『文法性のずれ及びぶれの発生メカニズムの解明および解消方法』2012~2015年)により、(後述の「聞き返し疑問文」に加えて)日本語の WH 疑問文には2種類あり、「WH 疑問文」と「クイズ疑問文」は発音上まったく同じなために、上のような判断の違いが話者間で生じることが分かった。「クイズ疑問文」の解釈だけを促すことも可能で、一つここに紹介すると、(1)に、「そのとき」を加えると、普通の「WH 疑問文」は派生されなくなり、介在効果が見られなくなると母語話者が一様に言う。英語の WH 疑問文の場合は、その区別は形式上明らかであり、「WH 疑問文」は What did Ken buy?と疑問詞 what が文頭に移動されているのに対し、クイズ番組の司会者が問題を尋ねるときなどによく用いられる、「クイズ疑問文」では、Ken bought what?のように、疑問詞は一切動かず、聞き逃したときに尋ねるもう一つの疑問文「聞き返し疑問文」と形式上同じであるが、日本語のように「WH 疑問文」と「クイズ疑問文」では、取り違えが起こることは、英語にはない(逆に、日本語の「聞き返し疑問文」では、「って?」という異なる助詞を使うので、「WH 疑問文」や「聞き返し疑問文」と見分けることはたやすい)。以上が正しいとすると、日本語の WH 疑問文に観察される、文法性のずれやぶれは、談話レベルの現象でなく、統語的な現象となり、言語のモジュール性が支持される。

2. 研究の目的

先の研究では、介在効果は統語現象であり、WH 疑問文において、文末の Complementizer(C)(i.e.「か」)と疑問詞(正確には、疑問詞につく演算子)の間で統語的操作(Agree「一致」)を行うために、介在効果が観察されると述べた。本研究で介在効果の分析をさらに推し進めるべく、シンハラ語も分析の対象とすることにした。その理由として、日本語では目に見えない演算子が、シンハラ語では、 d_0 と明示的に出現するためであり、現研究の主張である、介在効果の統語的分析を支持するものであるからである。

具体的に、疑問詞が島の内部に派生されたとき、 d_0 は疑問詞に直接付かず、島の端に直接付くことがわかっているが、このことは、島全体を疑問詞と見なし、島ごと WH 移動するという考え(Pied-piping)を支持する。そして、介在詞が島の内部にあっても、介在効果が観察されないのは、Agreeを行っているのは、Cと疑問詞でなく、Cと演算子である d_0 であるからである。このことから、介在効果が統語的現象ということが明確に示された。このように演算子を顕在的に示すシンハラ語の分析は、日本語の WH 疑問文の分析にも大いに貢献する余地がある。

また、シンハラ語において、how many/much NP ~?)のような数量疑問文の場合は、以下の例の(2)aのように、 d_0 が疑問詞のすぐ後でも、または(2)bのように文末でも可能であるという、興味深い事実がある。以下に、日本語を使って、シンハラ語の例を示す。

(2)a. 健が[何冊の本を] d_0 買いましたか?

b. [健が何冊の本を買いました] d_0 ?

そして、同例文の主語を(シンハラ語でも介在詞である)「健かメリーが」に変えると、(1)のように、(2)aでは介在効果が見られる。しかし、(2)bの場合、介在効果は見せない。したがって、Cと(疑問詞自体でなく)演算子(d_0)の間で、「一致」が行われていることが明確に示され、介在効果も統語的現象であることの更なる証拠となった。

しかし、この現象について、いくつかの疑問が出現した。ひとつは、シンハラ語の WH 疑問文において、数量疑問文であれば、演算子を文末に置くことが可能だが、その他の WH 疑問文では、不可能である。つまり、なぜ、数量疑問詞とそれ以外の疑問文で違いが生じるのか。実は、日本語においても、数量疑問文とその他の WH 疑問文で違いが見られた。例えば、介在効果は数量疑問文では観察されない。このことは、日本語においても、(目に見えない)演算子が、数量疑問文の場合は、文末(又は節末)に出現することが可能であることを示している。しかしながら、数量疑問文にまつわる「前提」に関しては、日本語とシンハラ語ではまったく別の振る舞いを示すことが分かった。そして、 d_0 を疑

問詞でなく節末に置くことができるのは、数量疑問文だけでなく、一部の埋込疑問文でも可能であることがわかっているがそれについても解明を目指すことを本研究の主目的とした。

上記以外にも、介在効果を引き起こす焦点化助詞「か」や「も」が接続詞として使われる場合、「AかBか」とか「AもBも」というように、つなげるもの（本研究では主に名詞句の接続を対象とした）と同数だけ焦点化助詞が必要であり、英語などの言語と異なる（英語の場合は、つなげるものが何個あるうが、and や or は一つあれば充分である。）このような現象を coordinator doubling と呼ぶが、満足のいく分析はまだ出されていないので、その統語的・意味的分析を行った。この現象に関しては、韓国語と比較・分析を行った。その理由として、日本語では、疑問詞に or を意味する「か」を付けると存在数量詞になるのに対し、韓国語では、普遍数量詞になるからである。（韓国語の場合、疑問詞そのものが存在数量詞にもなる。）このことも、説得力のある分析は出されていない。

最後に、日本語とシンハラ語だけでなく、英語、ドイツ語、中国語などにおける介在効果についての調査をすることも目的とした。理由は、日本語とシンハラ語と異なり、ドイツ語や中国語では島の内部でも介在効果を示すからである。本研究において、島内では介在効果を示さないという主張しているが、それに真っ向から対立するデータが英語やドイツ語で見られることが分かったからである。

3. 研究の方法

介在効果について、日本語とシンハラ語は非常に顕著な共通点を示す一方、数量疑問文の前提条件に関してはまったく異なることが観察されたが、本研究では、シンハラ語の母語話者による文法性判断および WH 疑問文、特に数量疑問文の意味的分析を扱う論文の分析から、数量疑問文では、その他の WH 疑問文と異なり、節全体（具体的に主節の TP（時制句））が CP に潜在的に移動するという仮説を立てた。そのことにより、島の内部に疑問詞がある場合は、島ごと WH 移動をするために、介在効果が（島内では）観察されなかったように、数量疑問文でも、介在効果が見られないのは、節全体が WH 移動を起こすからという説明ができる。シンハラ語において、演算子 d_0 が数量疑問文のときに文末においてもいい事実も上の主張と相いれる。ただ、この説により、数量疑問文における介在効果の解消は説明できるが、なぜ、数量疑問文のときだけ、節全体を WH 移動することができるのかの説明が残る。したがって、数量疑問文とその他の WH 疑問文においてどのような意味的違いがあるのかについて、主に意味論に関する文献を調査した。

次に、焦点化助詞の「か」と「も」が接続

詞として使われる現象の研究については、接続詞についての日本語及び韓国語の論文だけでなく、類型論的な立場からの資料や論文を吟味し、他の研究者からのコメントや口頭発表を通じて、主張を固めていった。

最後の英語およびドイツ語の介在効果については、Kotek (2014) の MIT 博士論文やその後の Erlewine との共著が Linguistic Inquiry で出版されたが、彼らの主張が、日本語とシンハラ語を基にした本主張と食い違うことがわかった。そこで、主張の比較を行い、本主張が英語やドイツ語の介在効果を説明できるかどうかを調査した（逆に、彼らの主張が日本語やシンハラ語に適用できるかどうかを検討した）。

4. 研究成果

介在効果についての成果は、三つの進展があり、まず最初に、前課題の主目的であった、介在効果は統語現象であるということを下（雑誌論文）の , , 及び（学会発表）の , , で引き続き発表し、好意的な批評を受けた。介在効果はもともと日本人の言語学者によって発見された現象であるが、その後韓国語やドイツ語について主に研究されるようになり、あまり日本語が言及されることはなくなった。しかし、日本語を基にして得られた発見を韓国語の学会や雑誌論文において発表することができたのは大きな成果である。

二つ目の進展は（学会発表）の , に見られるように、介在効果研究をもとに、日本語とシンハラ語の WH 疑問文の統語的・意味的研究を深めることができたことであった。論文としてはまだ日の目を見ていないが、現在、Journal of East Asian Linguistics に投稿中で、すでにフィードバックも受け取っており、修正のうえで再提出する予定である。投稿中ということで、詳細な内容は省略するが、日本語とシンハラ語の数量疑問文は他の WH 疑問文と異なり、節ごと WH 移動しても意味的に解釈不能とならないため、節の移動のような大規模な移動が可能であると述べた。ただ、前提条件が日本語とシンハラ語で異なるのは、演算子がシンハラ語では、新情報を明示する働きもあるのに対し、日本語の演算子にはそのような働きがないことに起因することがわかった。もし、本主張が正しいとすると、疑問文の意味自体でも英語のような言語と日本語やシンハラ語のような言語で微妙に違いがあるという今までにない主張となり、統語・意味論の分野にかなりの影響を及ぼしうる。

介在効果にまつわる3つめの進展であるが、これは本課題の後半に出現した問題で、当初の予定にはなかったものである。具体的に、本研究で主張してきた、介在効果が島の内部では観察されないという事実が英語やドイツ語では観察されるということが分かった。このことは、本主張がそのまま英語や

ドイツ語に適用できないことを示している。そこで、〔雑誌論文〕の、及び〔学会発表〕の、では、疑問詞について、日本語やシンハラ語のように、演算子と疑問詞自体が形態論的に分離可能な言語と英語やドイツ語のように分離が不可能な言語に分かれ、その分離可能性が、疑問詞が島内に派生されたときの対処法で違いを見せると主張した。具体的に、日本語やシンハラ語では、演算子が島の外側に付くことができるため、島内の疑問詞は介在効果を示さない。逆に、英語やドイツ語のような演算子と疑問詞が分離不可能な場合は、演算子自体が島の内部に残るため介在効果が観察される。今までのところ、島内にある疑問詞がどのようにして下接の条件を免れるかという問題に関して、Rooth, Beck, Kim, Shimoyama などに見られる、焦点化された句はその特別な意味派生 (alternative semantics) により、下接の条件に左右されないという考えと、島の有無に関わらず成立する束縛関係を島内にある疑問詞に当てはめる (より具体的に、演算子が疑問詞を束縛する) という、ふたつの考えが提唱されているが、本研究では、言語によって、alternative semantics を使うものと、束縛を使うものとに分かれるという結論に至った。この主張は、ハーバード大学の Jim Huang 教授などから高い評価を得た。

介在効果を研究する上で、接続詞の「か」と「も」についての研究も行った。主な理由として、それらは介在効果を引き起こし、また、疑問詞と結合することにより、様々な数量詞を生み出すという興味深い現象を示すからである。「か」は名詞句を disjunction と結び付け、「も」は conjunction で連結し、両者とも介在効果を引き起こし、名詞句の数と接続詞の数的一致するという、doubling を見せる点について非常に似ているが、「か」は doubling は任意であるのに、「も」は義務的、格助詞との共起などの点について、相違点も見られる。このトピックについては、〔雑誌論文〕の、及び〔学会発表〕の、で見られるように、韓国語との比較で研究を行った。結果として、doubling が行われた場合、最後の名詞句に後続する接続詞のみが意味的機能を有し、それ以外の接続詞は、意味的機能はなく、文法一致による形態的現象という主張を行った。これにより、英語などと同様に、日本語や韓国語でも、接続詞と名詞句は1対多の関係で接続が行われることがわかった。更には、日本語と韓国語の主な相違点として、疑問詞に disjunction を表す接続詞を付加すると、日本語の場合は存在数量詞になるのに対し、韓国語は普遍数量詞になるという観察は実は誤りであることがわかる。韓国語の disjunction は実は音形をもたず、名詞句間であらわれる助詞は文法一致による形態現象にすぎず、その助詞が今までずっと disjunction と考えられてきたために、上のような誤った観察がされてきた。しかし、本

主張によると、日本語も韓国語も疑問詞に disjunction を表す助詞を付加すると存在数量詞になるということは同じであるということになる。これにより、disjunction は目に見えないムード演算子の存在により、conjunction として解釈しようという、言語獲得の見地から妥当性を疑われる主張をしなくても、簡潔に説明ができるようになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- ・ Morita, Hisashi. "Intervention Effects inside Islands," 愛知県立大学外国語学部紀要第 50 号, 111-145, 2018 年 3 月、査読無
- ・ Morita, Hisashi. "Comparison of Japanese and Korean coordination structures," 愛知県立大学大学院論集第 19 号, 21-55, 2018 年 3 月、査読無
- ・ Morita, Hisashi and Namkil Kang. "The Intervention Effect as a Syntactic Phenomenon in Korean *Wh*-questions," *Studies in Generative Grammar* 26:2, 165-192, 査読有、2016 年 7 月
- ・ Morita, Hisashi. "Pied-piping of the Matrix Clause in Japanese and Sinhala," *Proceedings of the 17th Seoul International Conference on Generative Grammar*, 328-343, 2015 年 8 月、査読有
- ・ Morita, Hisashi. "How Unanswerable Questions Turn into Answerable," *Mulberry* 65, 2015 年 8 月、39-61, 査読無

〔学会発表〕(計 10 件)

- ・ Morita, Hisashi. "The Syntax of Coordinating Particles in Korean," *The 20th Meeting of the International Circle of Korean Linguistics*, ヘルシンキ大学、2017 年 6 月 27 日発表
- ・ Morita, Hisashi. "A Crosslinguistic Study of Intervention Effects inside and outside Islands: An Alternative to Alternative Semantics," *11th International Workshop on Theoretical East Asian Linguistics (TEAL-11)*, 台湾中央研究院 (Academia Sinica), 2017 年 6 月 3 日発表
- ・ Morita, Hisashi. "Covert Pied-piping in Japanese and Sinhala," *CASTL-FISH Seminar*, トロムソ大学、2017 年 1 月 31 日発表
- ・ Morita, Hisashi. "Morphology is misleading, but syntax is not: The syntax of coordination in Japanese and Korean," *Syntax Square*, マサチュー

- セツ工科大学, 2016年10月3日発表
- ・ Morita, Hisashi. "The Source of Existential Quantification and its relation to disjunction in Japanese," *Formal Approaches to Japanese Linguistics (FAJL)* 8, 三重大学, 2016年2月19日発表
 - ・ 森田久司、池田誉志 "Focused Heads in *That*-Relatives," 日本言語学会第151回大会, 名古屋大学, 2015年11月28日発表
 - ・ Morita, Hisashi. "The Core Semantic Property of the disjunction and the question particle, *ka*, in Japanese (and Old Japanese)," a paper presented at the international Workshop '*Questions and Disjunctions*', ウィーン大学, 2015年10月2日発表
 - ・ Morita, Hisashi. "Crosslinguistic examination of the interaction between contrastive and information focus," a paper presented at *the 3rd Graz Workshop on Information Structure (GWIS 3)*, グラーツ大学 (Austria), 2015年9月25日発表
 - ・ Morita, Hisashi. "Pied-piping of the Matrix Clause in Japanese and Sinhala," a paper presented at *the 17th Seoul International Conference on Generative Grammar*, 慶熙大学校(韓国), 2015年8月7日発表
 - ・ Morita, Hisashi. "A Syntactic Approach to Intervention Effects in Korean *Wh*-questions," a paper presented at *2015 International Conference on Korean Linguistics*, シカゴ大学, 2015年6月25日発表

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森田 久司 (MORITA, Hisashi)
愛知県立大学・外国語学部・准教授
研究者番号: 30381742